

人手・食料不足など深刻

パプア津波 死者4000人以上か

【アイトバ、パプアニューギニア北部 21日共同】パプアニューギニア北部を襲った津波の犠牲者はさらに増え、死者数は千五百人以上、行方不明者は二千五百人以上に上っている。西セピク州の被災地アイトバの災害対策当局者が二十一日、明らかにした。不明者が六千人以上との情報もある。同日になって少年二人が水上で救出されるなど救助活動は続いているが、被災後五日を迎え、不明者の多くは海などに流されたままとみられる。



倒壊した家屋から物資を探す住民ら（21日、パプアニューギニア北部のシッサノ）A.P.

死者が最も多く出たのはインドネシア領イリアンジヤヤ国境に近い町ワラブで町ごと波にのまれて家屋が崩壊、確認されただけで七百人が死じた。このほか海岸沿いのシッサノ、マロウなどの町で多くの犠牲者が出ている。

被災地に設置された六カ所の避難民センターにはけが人を含む約七千八百人が収容されているが、少し詰りめ状態の上、食料や医薬品が極度に不足している。パプアニューギニア軍やオーストラリアのボランティア医師らが手当てに当たっているが、十分な対応ができ

ない状態だ。

二十一日に救出された少年二人は五歳と六歳で、水につかりながらマンクロープの枝にしがみついていたところを四日ぶりに発見された。

現場一帯は電気もない漁村地帯。津波警報などもまったくなく、津波発生時は夕食の時間帯で家族が家に

集まっていた犠牲者が多くあったとみられる。

医療チームがパプアへ出発

パプアニューギニアで起きた津波災害の被災者を救済するため国際協力事業団（JICA）が派遣する国際緊急援助隊医療チーム計十一人が二十一日夜、成田空港から自航機で現地に向かった。医療チームには、医師、看護婦らが参加。医療品、テント、浄水器などを携え、二十三日にも同国北部の病院に入り、医療活動に当たる。派遣期間は八月三日まで。

一方、国際医療ボランティア団体「アジア医師連絡

協議会」（AMDA、本報岡山市）の医師や看護婦二人は同夜、関西空港を出発。オーストラリア経由で二十三日、現地に到着する。十日まで負傷者の治療を